

美しさの裏側： 化粧品による健康被害の実際と対策

矢上 晶子*1,*2,*3

1. はじめに

化粧品は、現代社会において欠かせないアイテムである一方で、刺激性やアレルギー性接触皮膚炎の原因となることがある。日本国内でも、様々な製品による接触皮膚炎や美白化粧品による脱色素斑、加水分解コムギ末やコチニール色素を含む製品が経皮感作を引き起こした結果、食物アレルギーを誘発するなど、多様な皮膚障害事例が報告されている。これらの症例は、特定の成分によって引き起こされ、それぞれ特徴的な臨床症状が誘発される。また、原因成分の特定には、適切な検査法が不可欠である。

化粧品による皮膚障害事例は、製品の新規開発や消費者の流行によりその時々で変わるものであり、本稿では、以前から変わらず生じる事例と共に、近年、その発生が続いている化粧品によるアレルギー性の皮膚障害事例の理解を深めたい。

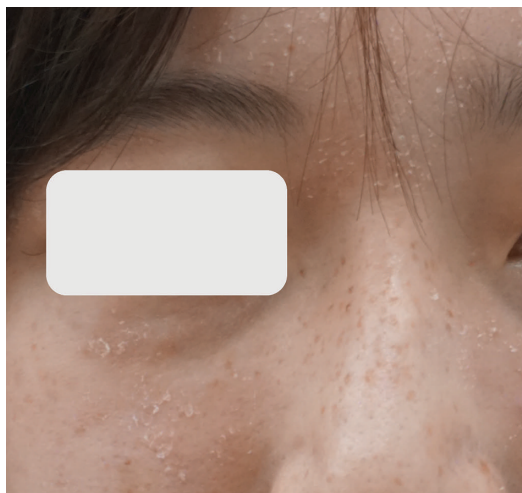
2. 化粧品による皮膚トラブルの臨床症状

化粧品による皮膚障害の多くは刺激性やアレルギー性接触皮膚炎であり、いわゆる“かぶれ”である。

2.1. 一次刺激性接触皮膚炎

化学的または物理的な物質によって皮膚が直接的に刺激されることによって生じる皮膚の炎症で

ある。「非アレルギー性接触皮膚炎」に分類され、化粧品やその他の外用剤が原因で日常的によく見られる皮膚障害の一つである¹⁾。原因物質には、洗剤、アルコール、酸性やアルカリ性の化学物質、特定の香料や保存料が含まれる。これらの刺激物質が皮膚に接触すると、皮膚の角質層を通して直接刺激物質が浸透し、炎症性サイトカインの放出や皮膚細胞に炎症反応が起こり、皮膚バリアが破壊される。症状としては、刺激物質にさらされた直後に赤み、かゆみ、ヒリヒリ感、皮膚の乾燥や鱗屑などが見られる(図1)。長期間にわたり刺激にさらされると、皮膚の厚みが増し、亀裂やびらんが生じる。化粧品に含まれる特定の成分(アルコ



■ 図1 刺激性接触皮膚炎

ール、香料、保存料、界面活性剤など)は皮膚に強い刺激を与え、一時的または長期的に一次刺激性接触皮膚炎を引き起こすことがある。症状が繰り返し誘発される消費者においては、化粧品や日用品で敏感肌用の化粧品や、低刺激性の成分を選ぶことでリスクを減らすことができることが勧められる。

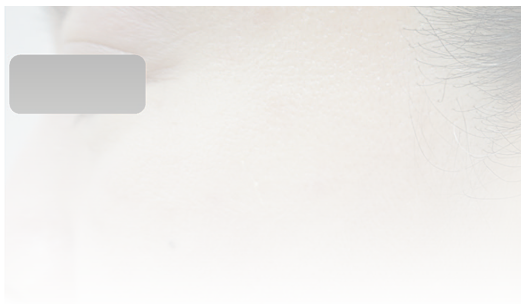
2.2. アレルギー性接触皮膚炎、他の皮膚障害事例

化粧品に含まれる特定の成分が皮膚に触れた際に、免疫系が過剰に反応することにより炎症を引き起こし、主に遅延型過敏反応(IV型アレルギー)に分類される³⁾。これは、化粧品に含まれるアレルゲンが皮膚に吸収され、免疫系がこれを異物と認識し、数時間から数日後にT細胞を介した炎症反応を引き起こす。繰り返し接触することで感作され、最初は無反応でも、何度も使用するうちに症状が現れるとされる。化粧品によるアレルギー性接触皮膚炎の原因となる主なアレルゲンとして

香料、保存料・防腐剤(パラベン、メチルクロロイソチアゾリノン(MCI)/メチルイソチアゾリノン(MI)など)、染料や顔料などが挙げられる。

アレルギー性接触皮膚炎の事例では、通常、使用後数時間から数日以内に、紅斑、浮腫、水疱、かゆみ、痛みを伴う皮疹が見られ、繰り返し使用することで皮膚の色素沈着や皮膚が厚くなる苔癬化という症状が誘発される(図2)。多くの場合かゆみを伴う搔破を繰り返している。アレルギー性接触皮膚炎が疑われる場合は、患者が使用している化粧品の使用期間、使用方法(適正に使用していたか)、併用していた化粧品、症状が誘発された部位、経過などを詳細に確認し、パッチテストを行い確定診断する(図3)²⁾。

一方、化粧品に含有される成分によっては脱色素斑が誘発されることもある⁴⁾(図4)。誘発される症状は、使用部位の不完全～完全脱色素斑であり発症当初は色むらが強い状態の症例が多い。この場合も原因と思われる化粧品の使用歴や使用方



これ以降の閲覧を希望の場合は、本誌をご購読ください。